



マナ通信



今月のマナ通信

◎5月の週日の聖書日課： 詩篇、テモテへの手紙第1・第2、テトスへの手紙、他
 ◎土曜日・日曜日の学び： 荒野の旅 からの感想です。

そこで、私は何よりもまず勧めます。すべての人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげなさい。」(1テモテ2:1)

パウロがテモテに何よりもまず勧めたのは、人のために、王たちと高い地位にあるすべての人のために祈ることでした。そうすることで、自分たちが敬虔さと品位を失わずに平安で落ち着いた生活を送ることができ、神様に喜ばれる、というのです。

パウロたちの時代の王や高い地位にあるのはキリスト教徒を迫害する支配者たちでしたから、パウロの勧めは「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(マタイ5:44) というイエス様のみことばに似ていると思います。

これは生まれながらの人にとっては不可能です。しかし、すでに救いを受けているキリスト者にとっては、聖霊様の働き・ご支配にゆだねることで可能になります。

今のこの世に置かれた私にとっても同じことです。迫害こそ受けていませんが、この世の高い地位にいる人たちには不満が先に立ってしまいます。しかしこの世の支配者に対して嘆くよりも、視点を主に向けて、その人たちのために主に祈りたいと思います。その結果として自分の敬虔や品位、生活を守ってくださる主に感謝したいです。(永井亮子)

1・日曜日の学びは「荒野の旅」です。モーセは赤児の時、川原でファラオの娘に拾われ、大きくなってからは、宮廷で生活します。ここで、立派に成長します。しかし、正義感と視野の狭さからイスラエル人が虐待されている現場を目撃して、エジプト人を殺害してしまいます。追われる身となりミディアンに逃れます。ここでの数十年間の生活はモーセを神が訓練する日々となりました。

モーセは羊を世話しながら「神の山ホレブ」に入り込みます。そこで不思議な光景を目にします。芝が燃えているのに燃え尽きることがありません。近づくと、芝の中から声があり「モーセ、モーセ」と主の使いが現れて下さったのです。神がモーセに与えて下さった使命は、エジプトに戻り、イスラエルを奴隷の状態から解放して、何百年も前に神が約束してくださった地に導くことでした。大きな使命を突然突きつけられてモーセは動揺しました。その為、神はモーセにつえを用いてしるしが出来るように約束して下さいました。

エジプトに戻ったモーセは兄アロンの協力を得てファラオと対決しますが、ファラオは心を頑なにするばかりです。こうして、最後の懲らしめとして、真夜中に主がエジプト全土を通り過ぎるとエジプト中の長子が死ぬことになるとう計画を神はおたてになりました。しかし、選民であるイスラエルの家庭には、家の柱、かまひに子羊の血を塗っておくと、神はその家を通り越そうというものでした。これは後に、イエス様が十字架で血を流し我々の罪を贖ってくださり、この事実を信じた人は救われる予表となりました。

神はあえて近道である「ペリシテ人への道」を選ばず、遠回りである葦の海に向かう道を選んだのです。これはあえて、神の山ホレブにイスラエルを導いて神の民として整える為でした。神は、昼は雲の柱、夜は火の柱でイスラエルの旅路を導いて下さいました。

戦車等を整えたエジプト軍が、葦の海の手前で宿営しているイスラエルに追いつきました。民は動揺しました。葦の海で行く手を塞がれたのです。そして、エジプトを出たことを後悔しました。こうした不平不満・不信仰が旅の間ずっと続きます。しかし、神はモーセを通して解決して下さいました。モーセが杖をあげると海が割れ、水が引き地面が現れました。

エジプトを出たイスラエルは2ヶ月ほどしてシナイの荒野に入ります。ここはモーセが芝の中から語りかける神に出会った所です。そしてモーセを通して神から「十戒」が与えられて、一つの信仰共同体として誕生することになりました。それは言い換えれば神と契約を締結することでした。

イスラエルの民は我々クリスチャンの先輩です。イスラエルの民は神との十戒によるシナイ契約ですが、我々はイエスの血による新しい契約です。罪のさばきを受けて下さったのも、罪から解放し義と認め救いを下さったのもイエスさまです。感謝します。(畑中伸之)

現在の医療では薬はない」私はその言葉を聞いて愕然としました。いつも、この調子なのです。いろいろ試行錯誤しても、結局は、私の頭の中では薬を変えても副作用のため体をこわす。先生に出した言葉はケアとしてなして下さる「信仰に身体をゆだねます」と云ってしまった。

果たして、どのようにすれば良いのか。……先生は「心のケアになっているのは確かだね」とおっしゃって下さった。退院してから15年余り、月に一度は病院へ行ってます。

私の思うのは、信じる信仰を持ってから「死ぬ」と云わなくなったこと。この頃では、誰にでもやさしく、穏やかで、冷静の気持ちでいられるようになった。これも主の恵みのおかげです。

毎日忘れることなく薬を飲み、主キリスト様への祈りを欠かさず、感謝の気持ちを忘れず、神様を崇め尊び、傲慢になりやすい自分をへりくだった生活でいられるよう主に懇願したい気持ちで一杯です。

初めのうち不安だったが神様への信頼が増すにつれ、聖霊様から頂く強い思いと、自分の道が間違った時、正しくコントロールして下さいる主に日々、感謝で一杯です。聖書に書かれている御言葉を日々の生活に適用し、平穏な生活を送ることが出来ますように。(畑中千恵子)



神は天から人の子らを見下ろされた。
 悟る者 神を求める者がいるかどうかと。
 3 彼らはことごとく背き去り
 だれもかれも無用の者となった。
 善を行う者はいない。
 だれ一人いない。」(詩53:2-3)

5月5日の〈みことばを味わおう〉から 聖書はすべて、「だれもかれも」が罪人であり、神様の目の前に「よい」「正しい」と認めていただける人は「いない」とはっきりと宣言するのです。

聖書はなぜ、そんなに厳しいこと、言いにくいことをはっきりと言うのでしょうか。それは、そのような罪人に「救い」がある、ということ言うためにほかなりません。……「救い」があるからこそ、聖書は「あなたは悪い」、「神様の目には愚かだ」と宣言するのです、とありました。

そして、神様は驚くばかりの完璧な救いとなってくださいました。ローマ人への手紙3章20節までは、すべての人は罪の下絶望的状态にありましたが、21節で、しかし今や……と驚くべき内容へと展開してゆきます。

今でも、自分の罪に絶望したり、義をたてようと心が見当違いの方向に向かって落ち込みそうになる時、ローマ3章21節で学んだ「しかし今や……」の御言葉が心に立ち上がってきて、救いの原点に戻らせていただけることは感謝、喜びです。

すなわち、イエスキリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません(ローマ3:22)。(福島三弥子)

心に恐れを覚える日/私はあなたに信頼します。……肉なる者が私に何をなし得るでしょう。」
 (詩篇56:3-4)

紀元前900年頃のダビデ王が、揺れ動く心の様を正直に告白し、主に全信頼を置く信仰を告白していることに、人間の本質はあまり変わらないのだと感じます。

同時にここまで信頼しきる信仰に、目を覚まさせられます。肉なる者を、恐れている自分の不純な信仰を、改めて見つめ直しています。

牧会書簡と言われているだけありテモテへの手紙にも、日々起こりうる問題への対処方が書かれていてパウロのテモテを通して信徒達への切々とした、でも力強い愛情を感じます。I テモテ6章は耳の痛い事柄が並んでいます。

6章5節の敬虔を利得の手段と考える者たち……とは見せかけの敬虔を装ってということでしょうか。敬虔そうに見せる過ちは犯していると恥ずかしい思いです。

間違った知識にも注意を払わなくてはなりません。日々御言葉に聞くこと、こつこつと続けることを、怠らないようにし、聖霊に守って頂くことを祈って居ます。(広瀬裕子)

三ハネの黙示録16章15節 『一見よ。わたしは盗人のように来る。目を覚まして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである—』

七つの鉢による災いは七つのラッパによる災いよりも厳しさが増しています。そして、ここでもまた悔い改めようとしないう頑な人々が描かれています。

つい災いの恐ろしさに意識が向いてしまいましたが、本当に恐れるべきはその災いの内容ではなく、主は思いがけない時に突然来られるということです。

目を覚まして主の再臨を待っているか?と問われたら…ハイと言えるような行い・生き方をするとすることに意識を向けさせられた1節でした。(栗原智恵子)

ああなたの重荷を主にゆだねよ。主があなたを支えてくださる。主は決して正しい者が揺るがされるようにはなさない。」(詩篇55:22)

ダビデは、批判やそしりを受けた時、苦しい思いをした時、いつも神の救いを信じて、「神を呼ぶ」と言っています。隠れたところで見られる方に祈り、そして求めたのです。

自分で解決策を見つけるのではなく、重荷をすべて主にゆだねることの大切さを、改めて教えていただきました。(外處トミ)

歩めども 道を阻まれ 悩む時
 主のみこころは 違う道へと

2021年5月31日

礼たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。」(II テモテ2:11-12)

主イエス様とともに歩む道は、この世と決別して御国に向かって歩む道だと教えられます。私たちの肉体はこの世にあり、この世の道を歩まなくてはなりません、内なる私は、主を見上げながら、すべてのことを主を通して見ながら歩いていかなくてはなりません。

数えきれない試練は、私たちの自己中心的な心を御霊に満たすために必要な聖霊様の働きの数々であることを示されます。

最近、眩暈がするので専門のクリニックに行きましたが、脳の血流が良くないことが原因のようでした。自分が来月60才になりますが、気持ちは若いつもりでも、体は確実に衰えていることを認識しました。



群馬県赤城自然公園 (青空に鳥が羽ばたくような雲)

会社でもいろいろな問題が次々と発生して、ストレスは限りがありません。これらの様々な試練を通じて、心は十字架に付けられ続けていますが、その一方で、これらは私が神様にたくさん愛されている何よりの証拠だと気付かされました。この御言葉は、自分に死んで初めて主とともに生きられることをはっきりと示して下さい。(外處徳昭)



私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。14 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に來られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」(Iテモテ1:13-16)

13節で、パウロは自分のことを、「私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした」と述べています。

「神を冒瀆する者」として、彼はキリスト者たち、および彼らの指導者イエスに関して悪口を言っていました。

「迫害する者」として、彼はキリスト者たちを処刑しようとしていました。この新しい宗派によって、ユダヤ教が脅威にさらされると思ったからです。彼は、邪悪な計画を実行しつつ、信者たちに対する「暴力をふるう者」でした。

訳文ではそれほど明確ではありませんが、「神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者」という3つのことばは、邪悪さの度合いが順に増し加わっています。

最初の罪は、ことばだけによるものです。二つ目は、人々がその信仰のゆえに負わされた苦しみを表しています。三つ目には、残忍性と虐待の意味が含まれています。

しかし、そんなパウロは「あわれみを受けました」。「信じていないときに知らないでしたことだったので」、当然受けるべき罰を受けずにすんだというのです。

パウロは、キリスト者を迫害していた時、自分は神に仕えていると思っていました。両親から、まことの神を礼拝するように教えられていた彼は、キリスト信仰は、旧約のヤハウエなる神に反するものである、と結論づけることしかできませんでした。彼は、キリスト者を殺すことによって、全力で神の名誉を守ろうとしたのでした。

パウロは、当然受けるべき罰から逃れただけでなく(あわれみを受け)、受けるに値しない「満ちあふれる」親切(恵み)も受けました。彼の罪が増し加わるところには、神の恵みも満ちあふれたのです(ロマ5:20)。

パウロに届いた恵みには、「キリスト・イエスにある信仰と愛」が伴っていました。これは、恵みが主から来たのと同様に、主に対する信仰と愛の源も主ご自身のうちに見いだされるということです。パウロは、神の恵みを拒むことなく、主イエスを信じることによって、また、それまで憎んでいたこのお方を愛することによって応答した、と解釈できます。

『「キリスト・イエスは罪人を救うために世に來られた』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」(15節)

この15節のことばから、私たちは真のキリスト信仰と他のすべての教えの違いの核心に触れることができます。

にせ宗教は、「人には、神に受け入れられるために自分でできることがある」と教えます。しかし、福音は、「人は罪人であり、失われており、自分で自分を救うことはできず、天国に行くためには、主イエスの十字架のみわざによる以外に方法はない」と教えます。

パウロが1章の前半で説明したような律法の教えには、肉の性質が働く余地がありました。それが人に語ることは、人は自らの救いのために何かしらの貢献ができる、ということです。しかし、福音が主張している通り、救いのみわざにおけるすべての栄光はキリストにのみ帰されるべきです。人には罪を犯すこと以外に何もできないのであり、救いに必要なすべてのことは主イエスが行われるのです。

神の御霊によって、パウロは、自分が「罪人のかしら」であることを悟るに至りました。「罪人のかしら」という呼び方が、偶像礼拝や不道徳に染まった人ではなく、非常に信心深い人、正統派のユダヤ人家庭に育った人物に与えられていることに注意したい。

パウロの一番の罪は、主イエス・キリストご自身とそのみわざに関する神のみことばを受け入れなかったことです。神の御子を拒むことは、最も罪深いことなのです。

パウロが「私はその罪人のかしらです」と、過去形ではなく現在形で語っていることも注意したい。敬虔な聖徒ほど、自分の罪深さを強く自覚しているということです。

Iコリント15章9節(紀元57年頃)で、パウロは自分のことを「使徒の中では最も小さい者」と呼びました。それからエペソ3章8節(紀元60年頃)では、「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私」と呼んでいます。そして、その数年後に書かれたIテモテ1章15節では、自分を「罪人のかしら」と呼んでいます。このように、パウロはキリスト者として謙遜を深めていった様子をうかがい知ることができます。

16節には、なぜパウロがあわれみを受けたのかが説明されています。それは、「キリスト・イエスがこの上ない寛容を」示す者となるためでした。

パウロは、「激しい敵意に打ち勝つ神の愛と、かたくなな反抗心を超越した神の忍耐を示す生きた先例(見本)」となったのです。

また、この節は、「たとえどんなに邪悪な者であったとしても、だれも絶望する必要はない」ということを意味しています。主はすでに「罪人のかしら」を救ってくださったのだから、罪を悔い改めて主のみもとに来れば、彼らも恵みとあわれみを見いだすことができるのです。

主を信じることによって、彼らも「永遠のいのち」を見いだすことができます。なんと有り難く、感謝なことでしょう。主を賛美・感謝します。(福島勲)

貴重なご感想ありがとうございました。

今回は6月号の感想を7月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)